

---

# 俺の旦那は勇者様

青紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の旦那は勇者様

### 【Nコード】

N1039M

### 【作者名】

青紫

### 【あらすじ】

浮気症（性ではなくこいつの場合症）の勇者を恋人に持つてしまったフェイオンの、魔王討伐物語。一応コメディ風にしたいと思ってます。多分冒険物になるはずです。出来るだけ早く更新予定。楽しんでいただければ幸いです。

## 生臭勇者に天誅を（前書き）

苦手な要素がある方は、ご注意ください。読んでからの苦情等はこちらで遠慮願います。

## 生臭勇者に天誅を

もし職業変更ができたなら、今すぐ弓使いになりたい。

俺は、街の雑踏の中で嬉しそうに美形野郎と会話している、赤髪の長身男を見て思った。

目に付いた美男を片っぱしから口説いて回っている、あの好色煩惱生臭勇者のアレを的にして、使い物にならなくしてやりたい。

「つーか、むしろ死ね」

心の中で罵倒するつもりが、期せずして腹の外に出てしまった。自分でも驚くほど怨念がこもった低音だ。偶然通りかかったおばさんが、脈絡なくこれが聞こえたのだらう、俺を振り向いたが、そんなの知ったこっちゃない。

俺は今、どうしようもない殺意と闘っているのだから。

「あゝあ、アーシュさんってばまたナンパ始めちゃったよ。こりゃ、ほっといたら魔王の事なんかすっぱり忘れちゃいそうだね」

俺が静かにバーサク状態へ移行していると、右斜め背後からやけにのんきな声がした。

半ば条件反射的な速さで火炎魔法の印を結んでいた俺は、パレットの言葉に手を止める。後ろに向き直って、へらへら笑顔を浮かべている癖毛で茶髪の男の顔を見た。

「ああ……そう言えば俺達は魔王を倒す為の旅をしているんだっとな。危うくあいつを焼き殺すところだった。抑止してくれてありがとう」

そうだ。俺達がこの見知らぬ街に来たのも、アーシュが舞いあがって男を漁ってるのも、全部魔王のせいなんだった。

俺の口調がやけに淡々としていたからだろう。柄にもなくパレットの表情が苦笑いだ。

「目が怖いよ、フェイオンさん。っていうか、ここにいたら邪魔だし、いい加減アーシュさんを回収しに行こうよ」

パレットは軽く怯えながらも、よく動く小動物のような茶色の瞳を遠くに向けた。

確かに、夕時の大通りに立ち尽くしている俺達は、通行の障害以外の何物でもない。俺はため息を吐きつつ、頷いて足を動かした。

街の内側に入ってすぐのこの大通りは、夕方になると食べ物のお店が軒を連ねるようだ。肉が焼ける香ばしい匂いや、その他の食欲をそそる煙がそこかしこに漂っている。威勢のいい客引きの声と、人々の会話が織りなすざわめきがすごい。気を抜いて歩いていると、突然耳元で怒声が上がって驚かされることなど多々ある。

「祭日でもないのに屋台が出るんだね。何だか楽しい街だなあ」  
できるだけ早くアーシュの元へ行くのに必死な俺の横で、また間抜けな声をする。

「ああ、そうだな。きっと治安がいいんだろう。俺達にとっても都合だ。情報収集にたっぷり時間をかけられる」

「ですね〜。……おつ、アーシュさんが前に立ってる店って、酒場じゃない？ 僕、先に入って席取っとくよ」

やっと問題の人物が近付いてきたところで、パレットが妙な歓声を上げた。どことなくほっとしたような、砂漠に湖を見つけたような。

「そうしてくれ。ついでに宿がどこにあるか聞いておいてくれないか？」

「分かった。じゃあ後で」

パレットは笑顔で頷くと、軽快な足取りで緑の扉に駆けて行った。さて。そろそろあの馬鹿のところへ行くとしよう。

俺は人混みから抜け出すと、色男を前に嬉々としているアーシュの後ろに立った。怒りを押し殺して声をかける。

「おい、随分良い男じゃないか。今晚、早速お持ち帰りか？」

アーシュの肩越しに敵を観察する。成程、アーシュが好きそうな

華奢で綺麗な男だ。庇護欲を掻き立てるような、美人薄命な奴にアイシユは弱い。見境なんてあったもんじゃない。

「ふっ、もちろん」

相手を俺だと確認もせずに即答しやがった。男の顔に軽く触れる仕草がさらにムカつく。体中が燃え上がっているみたいに熱い。着用しているローブが消し炭になりそうだ。

「だったら、燃やしていいんだな？」

「へっ？」

アイシユが今更こつちを振り向く。喜色満面が、瞬時に顔面蒼白に変わった。

俺は極上の笑みを顔に張り付けて、印を結び終えた。と同時に、右手を好色煩惱生臭勇者に突き出した。

「炎よ、我が身の怒りに応えて唸れっ。炎華<sup>えんか</sup>っ」

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああっ」

こうして、誉れ高き勇者の人生は、度重なる淫行によって幕を下ろしたのであった。  
めでたしめでたし。

……なわけないだろ。

酒場で紹介された宿の一室。

ベッド二つにささやかなテーブルと、椅子二脚があるだけの質素な部屋だ。外開きの窓からは、夜の涼やかな風が入って気持ちいい。床や壁はよく磨かれていて、木特有の艶が綺麗に蝋燭の火を反射し

ている。

あの後、騒ぎを聞きつけたパレットが外に出てきて、酒場の主人から聞いたこの宿にアーシュを担ぎ入れた。黒こげになったアーシュを見た店主に、死体だと誤解されて宿泊を拒否されかったり、大変だった。

そして、パレットは気を利かせたのかどうか分らないが、俺とアーシュを同室にしまったというわけだ。

「フエイ、お前いきなり燃やさなくなっただっていいじゃねえか。本気で昇天しそうになっただろ」

風呂に入って焼けただれた服を着替えたアーシュは、ベッドに座って髪を拭きながら言った。不満そうに眉をしかめている。

俺はもう一つのベッドに腰掛け、アーシュと向かい合う形で杖を抱えて座っている。理由は、言うまでもなく護身の為だ。アーシュは、所謂修羅場というやつに出くわすと、必ず強硬手段でうやむやにしようとする。魔法使いの俺は、勇者の力に敵わない。

俺はため息を吐いて首を振った。

「以前、『また男を口説いたら燃やされても文句は言わない』、とぼざいたのはどのどいつだったっけな？ あれからまだ一月も経ってないじゃないか」

アーシュは「あつ」と声を出した後、バツが悪そうに視線を逸らした。意気地のない勇者がいたものだ。

「その様子では、すでに忘却の彼方か？ 全く、俺はどこまで軽く見られているんだろうな」

人は怒りを通り越すと笑いに至るらしい。俺は微かに笑みらしきものを浮かべて言った。

「……えーと、そんなこともあったな」

沈黙。

外から入ってくるざわめきが、やけにはつきり聞こえる。重苦しい静けさが、しばらく俺達の間に横たわった。

そして、脳が何百回もその無神経かつ腹立たしいことこの上ない

言葉を反芻した後、俺のなんとか袋の緒が音を立ててプチ切れた。

勢いに任せて立つと、俺は紫水晶を戴いた杖を振りかざして、目を丸くしているアーシュに詰め寄った。因みに、この紫水晶。かつて今と似たようなことが起きた時にアーシュの肋骨を粉碎している。

「そんなこともあったな、だと？ ふざけるなつ、この淫乱自称勇者つ。毎度毎度俺がどんな想いで、知らない男と仲良くしている貴様を見てると思ってんだつ。いい加減にしろつ、つーか死ねつ。いつそ貴様のような強欲厚顔無恥野郎は死んでしまえつ。それとも俺が殺してやろうかつ？ 今すぐ血の海に沈めてくれようかつ？」

言い終わらない内に、俺はありったけの力を込めてアーシュの脳天に杖を振り下ろした。

が、俺の最終武器である紫水晶は、やることと殺ることしか詰まっていないアーシュの頭をかち割ってはくれなかった。

アーシュの腕力はたとえ紛いものと言えど、勇者のそれだ。アーシュの大きい掌は、紫水晶をこともなげに掴んで止めてしまった。

日頃杖より重いものを持ったことがない、俺の軟弱な力とは勝負にならないのだ。

俺が固まって動けないでいると、アーシュに握りしめていた杖を床に叩き落とされた。重いものが床に当たる鈍い音がして、ごろごろと遠くに転がって行ってしまった。

虚しい音が消えると、だんだん怒りが再燃し始める。ああ、転職したい。

「貴様つ、それでも勇者の端くれかつ。戦闘以外で勇者の力……」  
言ってる途中で、アーシュの腕が伸びてきて俺の背中に回った。  
やばい。また強行突破か？

そんなことを思っている間に、俺はアーシュの膝の上に抱きかかえられている状態にされてしまった。

「あつ、貴様、今度こそはその手に乗るかつ。離せ万年発情期つ」



ああ、畜生。どうして俺は魔法使いなんて職業を選んでしまったんだろう。どうせなら武道家とかにしておけばよかった。びくともしない腕の中で、暴れつつ無駄に嘆いてみる。

「フエイ、うるさい」

真剣な色を含んだ艶っぽい低音が、俺の鼓膜をくすぐる。こいつ、俺が耳弱いことを利用してやがる。なんて卑怯なやつだ。

気を強く持つて流されないようにしようと必死になっている俺だったが、耳元で囁かれるだけで心臓が酷く脈打ってしまう。

アーシュは俺の体から力が抜けると、俺の黒髪を撫でて顔を覗き込んできた。黄緑色の瞳が俺を貫いて離さない。そう、俺はいつだってこの瞳に敵わない。

「卑怯者。俺がお前を拒絶できないって分かってて、こんな風に曖昧にする」

「ふっ、当然。フエイはオレの嫁だからな、知らないことなんてねーし」

熱い吐息が額にかかって、その場所にアーシュの唇が落ちる。優しいその感触に、愛を感じずにはいられない。

「アーシュ。今度浮気したらただじゃおかないからな。覚悟しておけよ」

俺はゆっくりアーシュの首に腕を回して呟いた。我ながら声が甘い。

小さく笑って、アーシュは俺をベッドに組み敷いた。

「何回同じこと言うつもりだ？ フエイオン」

アーシュが俺の名前をちゃんと呼ぶ時は、『今夜は寝かせない』という合図だ。心なしか、顔つきが獲物を見つけた肉食動物みたいに変貌したような。

アーシュの精悍な顔が近付く。俺は静かに目を閉じた。

「フエイオン、好きなのはお前だけ……」

聞いただけで溶けそうな声を発するアーシュ。俺は心底でほくそ笑んだ。

時は満ちたりっ。

あとほんの僅かで唇が重なる距離になると、アーシュの首に回していた腕を緩め、代わりに両手をかけた。

馬鹿なアーシュは気付きもしない。

俺は目を開けて、鼻で笑ってやった。

「おい、貴様の大事なところが無防備だぞ」

「なっ」

「油断したな、勇者様」

ニヤリと笑って、職業は関係ない弱点を思いつきり膝でけり上げてやった。

「いぎゃあああああああああああああああああああああ  
っ」

その後、血相を変えたパレットが部屋に入ってきた時、アーシュはベッドの上で号泣しながら俺に許しを乞うていた。

## 生臭勇者に天誅を（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

世界設定や魔王討伐の詳細はおいおい書こうと思っています。

## 長い長い旅立ちまでの朝

逆襲の夜が明けた朝。

軽やかな鳥のさえずりが聞こえ、俺は心地よい眠りから覚めた。瞼を上げて窓の方を見ると、窓にかかっているカーテンが、明るい日の光に柔らかく照らされていた。今日も天気がいいみたいだ。

軽く目を擦りながらベッドから出る。初秋に差ししかかっていると、は言え、歩くと汗ばむような時期だ。窓を閉め切って寝たせいで、部屋全体にこもったぬるい空気が、体にまとわりついてくる。

「ちっ、不愉快な季節だ」

暑過ぎるのも寒過ぎるのも苦手な俺の口は、勝手に動いて愚痴をこぼした。今日は晴れているらしいからまだいいが、長雨なんか降りやがった時には、不愉快指数が限界点を超える。我がままと詰なじられようが、王族に飼育されている室内猫かと皮肉られようが、嫌なもの嫌だ。

俺は靴を履くなりカーテンを開け、降り注ぐ日差しに目を細めつつ窓を外へ押しやった。

途端に、乾いた風が待っていたとばかりに流れ込んでくる。頬を撫でて行く優しい感触に、俺の口元は自然と綻ぶ。この季節の気候は鬱陶しいが、風だけは快くて好きなのだ。

借りている部屋が二階にあるおかげで、街を結構な範囲見渡せる。アーシュの起きだす気配がまるでしないから、俺は暇つぶしに街の様子を探ってみることにした。きっと、情報収集の際も役に立つだろうし。

建物が、赤茶けた煉瓦の屋根に、白っぽい石壁で統一されているからか、雑然としてはいるがどこか秩序立って見えるところだ。住民の生活水準もそこそ高いのだろう。昨日、通りですれ違った人達の表情も明るかった。街に入る時に接した門番も弱そうには見えなかったし、警備隊の類もしっかり機能しているようだ。街を取り

囲んでいる外壁も、石造りの頑丈そうなものだった。

街並みを気をつけて観察してみると、家と家の間に間口の狭い店らしきものが建っていたり、傾斜が酷く急な屋根の家があったり、眺めているだけで楽しい。朝日に薄く彩られた綺麗な青空までも、その景觀にしつとりと溶け込んでいる。巨大な絵画を前にしているみたいだ。

「……住んでみたくなるところだな」

この平穏な景色を眺めていると、昨日ブチ切れたことが信じられないくらい心安くられる。

俺は長いため息を吐いて、窓枠にもたれた。心が寛大になったついでに、いまだに爆睡中の勇者様について考えてみることにする。

思えば、アーシュと恋仲になってから四年。アーシュが浮気してない時なんてなかった。気付けばいつも、あの馬鹿は俺が知らない男と遊んでいた。俺は唯の一度だって、アーシュの他に誰かと付き合ったことがないのに。

まあ、あいつがそういうやつだって分かって好きになったんだから、俺もどうかしているな。一概にアーシュが悪いとも言えないか。

俺の広がった心には、今までにない発想が浮かび始めた。不思議と腹が立つこともない。

つか、俺はいちいち怒り過ぎなんだな。腕を組んで深く息を吐く。アーシュの男好きは昔からなんだから、ある程度の我慢は必要だ。

俺は部屋へ視線を移し、大の字になって眠っているアーシュを見た。

体の中心から、なにか温かいものが全身に行き渡っていく。これが母性というものか。いや、俺は男だから父性か。

「なんだかんだ、俺はあの無理性男が好きだってことだな」

心なしか、自分の声が呆れている。結局、お馴染みの答えに終着

して、俺の思索は終わった。

窓辺を離れて、ベッドの脇に近寄った。覗き込んでみると、子供っぽい無防備な寝顔で、たまらなく愛しくなった。なにか嬉しい夢でも見ているのか、弛んだ口元がこれまた可愛い。普段の色欲魔の影は微塵もない。

「アーシュ」

そつと髪に触れながら声をかける。もうそろそろ起こさないとまずいだろう。

反応なし。

「アーシュ、起きろ」

反応なし。

「おい、朝だぞ、アーシュ」

「……ん、フエ、イ？」

数秒ぐずるように唸ってから、アーシュは掠れ声を出した。眩しいのか、片腕で目を覆い隠す。

三度目でやっと起きた。

「そろそろ自分で起きられるようになったらどうだ？ ガキでも一人で起きるぞ」

「うつせえ。他人と自分を比べんのはよくないと思うぞ」

むっくり起き上がりながら、アーシュはもつともらしいことをほざきやがった。

「その使い方は間違ってると思うけどな」

「フエイ、おはようの口付けはないのか？」

親切に指摘してやると、軽く無視された。朝から元気なアーシュに腕をぐいっと引き寄せられて、俺は膝の上に着地した。顎をつ、と持ち上げられて、黄緑色の瞳とかち合う。

「勝手に気色悪い習慣を作り出さないでくれ。それから俺を猫みたいに扱うな、変態勇者」

「……オレの神聖な職業の前に、そういう形容詞つけんなよな。変態でいることがオレの仕事みたいに聞こえるだろーが」

「くじ引きで職業選んどいて、お前が『神聖な』とか言う資格ないからな。お前の存在自体が、歴代の勇者への冒瀆なんだから」

俺はアーシュの手をどかして、海の底まで届きそうなため息を吐いた。

「ひでえこと言うな、フェイ。オレだつてなりたくなつたわけじやねえーんだぞ。自分で選ぶのが面倒で、村にある全職業紙に書いて引いたら、運悪く勇者になっちまっただけだ。歴代の勇者じゃなくて被害者はオレだろ」

口をとがらせて俺に不平を言う。俺に言われても困るのだが、そもそも文句を言う前にアーシュのやり方が悪かったただけだ。自分に責任があるというのに、こいつは本当にだめだ。

なにをかわんや、俺は首を横に振ってアーシュの膝から降りた。「つーか、ほら、そんなことはどうでもいいから、こつち来いよフェイ。昨日からお前冷た過ぎるぞ。つてーか、あれほんと死ぬかと思つたんだからな」

「しつこい。うだうだ言つてないで、さつさと用意するぞ。パレットに悪いだろ」

俺はアーシュの戯言を一蹴して、さつさと身支度を整えにかかった。

「遅いよー、二人とも。僕もう朝食済ませちゃった」

俺達が廊下に出ると、隣室からパレットが出てきた。言っている内容の割に、表情は実ににこやか。不思議な少年だ。

「悪かったな。フェイが小姑みてーにぐちぐちと説教するもんだからさ」

アーシュは言い淀むことなく適当に話をでっち上げた。俺は表情を変えずに腹をどついてやった。

「あはは。確かにフェイオンさんって、そんな感じするな。嫁いびりとかしそう」

アーシュの話を信じてはいないようだが、パレットはふざけるの

が趣味みたいなやつだ。へらへら笑って悪乗りしだす。

「はぁー、全く。お前達といると疲れる」

一階に降りる階段を目指しながら、俺は眉間をぎゅっと押さえた。この二人に主導権を渡したら、終末がきたって話は進まないだろう。

階下に降りた俺達は、六つあるテーブルの内、食堂の左奥にある席につくことにした。パレットと同じく朝食を済ませてしまった客が多いのだろう。俺達の他には、行商人らしき三人組しかいない。

「んで？ 俺達どこ行くんだっけ？」

アーシュはやはり旅の目的を忘れていらしい。パンをちぎりながら悪びれもせずと言った。

「全く、なんてやつだお前は。俺達は魔物に街を襲わせてる魔王討伐の為に旅してるんだ」

「そうそう、破壊ついでに若い男の人も連れ去られてるらしいよ。」

きっとその人達を戦力にして、国を滅ぼすつもりなんだと思う」

パレットはテーブルの人面木目を指でいじりながら、楽しそうに言った。にこにこ他人事みたいだ。

「ああ、そうだったな」

死んだ目で呟くと、アーシュは遠い目をして窓の外に視線を向けた。

「……勇者になんてならなきゃよかった」

「黙れ、ものぐさ勇者。自己責任だろ。今更ぐだぐだ文句垂れるな、馬鹿野郎」

この期に及んで、本当にしょうもないやつだ。俺は冷たい声音でにっこり笑った。

「うわぁ、怖いよフェイオンさん。やっと笑ったと思ったら、そんな心無い笑顔」

何気なくアーシュの皿から卵焼きをくすねる。この間も笑顔。流石元盗賊なだけあり、鮮やかな手の運びだ。パレットとは二年程前からの付き合いだが、手癖の悪さは治らないようだ。



アーシュは僅かに眉間を寄せたが、文句を言うのが面倒なのか、代わりに俺の目をじっと見つめてくる。

仕方ない。止める間もなく弛む口元に、自分でもやれやれと思いつつも、この憐みを誘う『お願い光線』に弱い俺は、フォークに卵焼きを刺してアーシュの口に入れた。

もぐもぐと幸せそうに口を動かしている姿を目に映すと、嫌でも愛しさが込み上げてくる。

「ふふふっ。フェイオンさんって、ほんとにアーシュさんが好きだよ。愛だね、いいね、憎いね。」

「うるさい、パレット。ほら、早く朝食済ませて情報収集行くぞ」  
照れ隠しというか、恥ずかしくて俺は早口で捲し立てた。まだ自分の分を食べ終えてないというのに、だ。

卵焼きを飲み込んだアーシュが、にやにや嫌な笑いを顔に浮かべて俺の頬に触れた。

「平気で卵焼きを俺に食わせられるくせに、指摘されたら恥ずかしがってやんの。可愛いなあ、フェイは」

「打つ飛ばすぞ、アーシュ」

「まあまあ、落ち着いてよフェイオンさん。とりあえず僕、あの商人さん達に話聞いてくるから、二人はゆっくり食べてて」

椅子を引いて立ち上がると、てるてると商人っぽい三人組に近寄って行った。盗みを働かないか心配だ。俺はその後ろ姿を見て心もとなくなつた。なにせ、商人と言えば、パレットにしてみればカモという意味なのだから。

「パレットなら大丈夫だろ。オレ達に迷惑かけるようなことしねえよ」

皿を持って行儀悪く食べ物を掻き込むアーシュ。

アーシュも気にかけていたらしい。俺は少しだけ見直した。

「あいつはプロだから、ばれるようなヘマはしねえよ」

「そっちの信頼なのか、お前の場合。見直した甲斐もないな、即刻前言撤回しよう」

「見直したなら、見直したままにしとけ。ケチだな、フエイ」

一気に食事を終わらせて、口をとがらせるアーシュ。本当に、こいつは勇者の資格なんか微塵もないと思う。俺はため息を吐いた。

それにしても、勇者という職業に就いたからには、いずれ魔王と対峙しなければならぬ。そうすると、どうしても最悪の事態のことが浮上してくる。正直酷く不安だ。それこそ、息が詰まるくらい。「アーシュ、過程はともかく、勇者になったからには責任持って魔王倒せよ。歴代の勇者は帰ってきたはしなかったが、魔王の活動を約百年間鎮静化できている。お前はどうか考えてもできなさそうだが、少なくとも刺し違えるぐらいの覚悟くらい持ったらどうだ」

声は震えていなかったはずだ。表情は少し引きつっていたかもしれない。俺はアーシュの透き通るように澄んだ黄緑色の瞳を覗き込んだ。

「ん〜？ 大丈夫だって。そんなに不安そうにすんなよな、フエイ。オレがつええことくらい知ってんだろ？」

俺の沈んでいく心境に反比例して、アーシュは微笑を浮かべながらの軽い調子だ。俺を安心させる為か、隣にきて手を握ってくれた。アーシュの手は俺の手を包み込んでしまえる。その馴染み深い温かさが、波立った心を徐々に沈めて行った。同時に、切なさも込み上げてくる。

アーシュという存在は、俺を辛くも幸せにもしてしまうから、両方の感情をいっぺんに感じると、どうしていいかわからなくなる。怒りたくもなるし、嬉しくもなるし、泣きたくもなるし、笑いたくもなる。

だから、村を出てきてからこの街にくるまでに、結構混乱していたりするから、ふとした瞬間にどうしようもなく怖くなるんだ。

できるなら、アーシュが適当に職業を選んでいる時まで遡って、強制的に俺が決めてしまいたい。平平凡凡な生活ができる、命にかかわることがないような職業に。

「フエイ、こっち向け」

ぼうつと考えたくないことに思考を絡めとられていると、アーシュの優しく甘やかすような囁きが聞こえた。

斜め上を向くと、アーシュの手が俺の頬を包んだ。瞳が光を湛えてこつちを見つめていた。たまらなく怖くなった。俺は、アーシュを失いたくない。ずっと一緒にいたいから。

アーシュは小さく微笑すると、そつと俺の唇に口付けた。労りと慈しみに満ちた感触に、泣きそうになる。

「優しく、するな。泣きそうだから」

俺はアーシュから離れようと、両手で体を押した。が、だめだった。アーシュの腕は俺を完全に拘束していて、悲しくて全然力が入らないのに、逃れられるはずがない。

「泣いてもいいぞ。フェイ、お前は我慢できる程強くない。もつとオレに甘えればいい……な？」

髪を撫でてくれるアーシュは、俺の目じりに一つ唇を落とし、強く抱きしめてくれた。俺はアーシュの背中に腕を回して、温かい胸に顔を押し付けた。

「アーシュは、怖くないのか？ 死ぬかもしれないんだぞ？」

「ふっ、怖くなんかねえよ。オレが怖いとしたら、自分以外のことだ。例えば、フェイがいなくなるとか、フェイが他の男のそこへ嫁に行くとか、フェイをオレが傷つけるとか」

アーシュの手が優しい。ああ、俺はこいつが好きで好きでたまらない。

「俺は、何回もお前に傷つけられてるんだが？ 浮気とか浮気とか」

「うっ……、でも、オレはフェイが一番だぞ？ これは揺るぎようがないし、心の浮気までしたわけじゃないし……」

途端に真剣だった目が、空中でせわしなく泳ぎ始めた。全く、仕方ないやつだな。

アーシュの優しい言葉と、挙動不審ぶりの落差がおかしくて、俺の心は幾分軽くなった。苦笑する余裕もできたから、暫くは大丈夫

だろう。

「もういい、お前の浮気は治らないと開き直ることにしたから。だからと言って、調子に乗るなよ勇者様。やっぱり耐えられないかもしれないし、燃やしたくなるかもしれない」

上目使いでアーシュを見やると、心なしか血色が悪くなったような気がする。

「モウ、モヤサナイデクダサイ。アト、ゼツタイアソコハケラナイデッ」

「何故片言なんだ？ あと、うざいぞ敬語が」

「酷っ、さっきまでのしおらしさは何処行っただよ。せつかく、子猫みたいで可愛かったのにな」

「子猫って言うな、変態。もう俺は復活したんだ、お前の助けはいらない」

恥ずかしさを紛らわす為に少々きついことを言ってしまった。案の定、アーシュの表情がみるみる陰ってしまった。

がっかり顔のアーシュも、何とも形容し難く愛おしい。償いの意味も含めて、俺はアーシュの頬に手を添えた。情けない表情がこっちを向く。

「嘘だ。ありがとう、アーシュ。大好きだぞ」

早口に言っで、自分から唇を重ねた。不意を突かれて、アーシュは柄にもなく硬直しているみたいだ。いつもならすかさず体に回る腕が動いていない。面白い。

ゆっくり顔を離して見上げると、仄かに頬を紅潮させた表情があった。

正直吃驚だ。

この万年発情好色野郎が、こんな純情で初な<sup>うぶ</sup>反応をするとは、夢にも思っていなかったから。

「アーシュ、どうした？ 随分大人しいじゃないか。っていうか、何か言ってくれるなり表現してくれるなりしないと、気まずいんだが」

自分一人が突っ走ってるみたいで、恥ずかしい。

すると、アーシュはのろのろと俺から手を離し、自分の髪を掻き上げて頭を振り、口元を弛めてくすくす笑い始めた。何がおかしいのだろうか。

俺の方を見て、尚も肩を震わせながら言う。

「フエイ、慣れないことはするもんじゃないな。黙ってオレの反応待ってるとかできなかったんだ？ ふっふっふっ、可愛いな、フエイオン」

どうやら、満足してもらえたらしい。アーシュに髪を掻きまわされながら、内心でほっとした。

「はい、もうお邪魔してもいいですか？」

割り込む隙を辛抱強く待っていてくれたのだろう。パレットがここぞとばかりに手を挙げて声を大にした。

「ああ、気を遣わせて悪かったな。何か情報をもらえたか？」

「うん、面白い話が聞けたんだよ」

パレットは椅子に座りながら、嬉々とした様子で話した。

「このヒシュタの街から南西に進んでいくと、ペオルっていう大きな森があるんだって。それで、ペオルの森の奥に、盗賊団が住んでるんだって。あつ、一応断っておくけど、僕の所属してたこと違って、義賊じゃないらしくて、すごい乱暴者の集団らしいよ。でね、その盗賊団がハマートの塔から、勇者の宝剣を盗みだしたって噂が広まってるんだって。興味あるよね？」

「確か、ハマートの塔って勇者の魂を祀ってるっていう、アレ？」

アーシュは訝しそうに眉を寄せた。俺も、その話は俄かに信じ難かった。

「その話、おかしくないか？ 魔王城ネルガルがあるシュトリ島から、勇者が戻ったという記録はどこにもない。それ故、勇者が本当に死んだのかさえよく分かっていないことにもなるが、そもそも宝剣などあるはずがない。勇者装備というものが、この世界にはないんだからな」

「そうだぞ。オレ、勇者のはずなのに武器とか鎧とか全部自腹切つて買い揃えたんだぜ？ 村長とか、誰も援助してくれなかった」

アーシュの口から切ない吐息がもれる。本当に、アーシュは勇者になってしまったばかりに、家財一切と土地を売って武器と防具に変えたのだ。小指の先程の労力と時間をかけることを惜しんだが為に。

「ええー。でも、アーシュさんはフェイオンさんの家に住んでたじゃん。あんまり困ってない気がするんだけど」

確かに。

「ふっ……。オレの意見はだな」

「誤魔化すな、アーシュ。でも確かに、お前の事情なんぞどうでもいいな。話を先に進めよう」

「えっ……。フェイ、酷っ」

アーシュは一瞬傷ついた顔をしたが、パレットに促されて口を開いた。

「高確率で無駄足だから、さっさと魔王のところに乗り込んだ方がいいと思う。早く帰りたいし」

アーシュの声が死ぬ程げんがりしている。相当面倒みたいだ。

「ってーかさあ、魔王なんかほつといていいじゃんよ。何回倒しても蘇るみたいだしさ。オレは魔王なんか時間かけるより、フェイとのめくるめくドッキドキ同棲生活に入り浸りたいんだけど」

「キモイこと言うな、なんちゃって勇者」

「僕も世界とか救いたくもないんだけどね。一応行ってみるだけ行ってみない？ 面白そうだし。アーシュさんにとっては、魔王城って楽園だと思うし」

そう言えば、魔王は若い男をさらっているんだったな。忘れるとは迂闊だった。浮気どころの騒ぎじゃなくなるだろう、絶対。

「楽園というか堕楽園もしくは快楽園だろ」

「この世の快楽園か……。いい響きだ」

「まあ、行こうよ魔王倒しに。僕としては、一応盗賊団のところに行

つといた方がいいと思う。だって、アーシュさん、勇者の最低限の力は貰ったけど、ほとんど生身なのに魔法とか魔物とかで武装した魔王と闘うんだよ？ 今のままじゃ、どっちにしろ一瞬で昇天確定だよ」

俺は、パレットの意見に心の底から賛成だ。アーシュにもしものことがあつたらと思うだけで、悪寒が走って息が苦しくなる。なるべく、完全武装に近い装備で魔王城に行きたい。

「俺もパレットと同意見だ。アーシュ、怪我だけじゃ済まないんだからな。さっき俺に言ったことは全部嘘か、ん？ お前が瞬殺されることを俺が望んでいても思ってるのか？」

凍てつく声音で淡々と言うと、アーシュはまた視線をあっちこっちに飛ばした。情けないやつだな、アーシュは。

「じゃあ、決まりだね。ペオルの森に行こうか」

パレットは、散歩にでも行くような調子で、歌うようにそう言った。

## 長い長い旅立ちまでの朝（後書き）

やっとこさ旅立ちです。

次回からは、三人があんな目やこんな目に遭っていく気がします。  
今回も読んでくださりありがとうございます。  
楽しんでいただけたなら幸いです。



**勇者の勸と、まさかのまさか（前書き）**

苦手な要素のある方はご注意を

## 勇者の勘と、まさかのまさか

「とりあえず、一つの情報源で全てを判断するわけにはいかない。もう少し聞き込みしてから行こう」

宿屋を後にした俺達は、昨日アーシュがナンパにせいを出していたメインストリートに行くことになった。何だかんだあって、まだ酒場での情報収集もできていないし、人が多い分噂話にこと欠くことはないからだ。

メインストリートと言えど、昼間の混み具合は夕方より幾分マシだ。周りの状況を把握しながらゆっくり歩を進めても、邪魔になったりしない。

真中に俺、右アーシュ、左パレットというように、三人並んで歩く。

ヒシュタは規模で言うとか中くらいの街だ。様々な種類の店があり、蔵書数が豊富そうな本屋や、防御力、攻撃力が高いと見える装備品の店などが軒を連ねている。眺めているだけで楽しい。

俺は、アーシュを見上げた。やや鋭い双眸をまっすぐ前に向けて、凜然と歩んでいる姿に惚れ惚れとしてしまう。横顔が恰好よくてたまらない。黙っていれば、何処に出しても恥ずかしくない男前なものになる。

今度は是非、魔王討伐の為とか関係なくアーシュと二人で観光したい。俺は二人で漫ろ<sup>そぞろ</sup>歩いている場面を想像して、一人でにやけてしまった。落ち着け、自分。

流石に視線を感じたのか、不意にアーシュがこっちを向いた。

「フエイ、腹減った」

「知るかつ」

現実にいきなり意識を戻された俺は、甘い自分の妄想が気恥かしくて顔を俯けた。

しばらく進んだところで、ある店に俺の目はくぎ付けになった。  
肉屋と金物屋に押し潰されるようにして建っている、一見ただけでは何の店か分からない怪しげな雰囲気。時間帯など関係なしにきつちりと引かれている分厚いカーテン。入口に置かれている、黒猫の置物三体。

これは、完璧に魔術用具店だ。自然に足が止まり、心拍数が若干上がった。

魔法使いという職業を選んで身に付いた、不思議アイテムへの尋常ではない関心が、俺に店へ入れと囁き始める。

危うく通り過ぎそうになったアーシュの腕を掴み、俺は早口で言った。

「アーシュ、俺はこの店に用事がある。だから先にパレットと酒場に行っていてくれ。後から追いかけるから」

「この店……魔術用具店か。ん、お前を一人行動させんのやなんだけどな」

アーシュは行き過ぎそうになったパレットの襟首を掴んで引き戻しながら、歯切れ悪く言った。

「何を心配しているのか分からないが、俺は絶対この店に入る。お前達は職業が違うからどうせ入れないんだから、先に行ってくれ」

魔術用具店に限らず何らかの魔術を扱う店は、八割方魔法使いしか入ることができないらしい。店先に置いてある黒猫の置物が魔法使いとそうでない職業の人間とを見分けるのだ。客層を限定する理由はよく分からないが、強盗対策といったところだろうと、俺は推測する。

アーシュに視線を向けると、不服そうに眉を顰めた表情があった。その後ろからパレットがひょこつと顔を出した。喉元をさすりつつ、軽い調子で言う。

「アーシュさんは、店主が猥褻行為わいせつをするような悪漢あくまんだったら、とか考えてるんだと思うよ。魔術用具店の場合、ある意味密室だからね」

ああ、成程。俺は今まで村にある魔術用具店にしか行ったことがない。しかも、その類の店は一軒しかなく、おまけに店主は女性だ。「でも、店主が男とは限らないだろ。それに、魔法使いなんかを生業にするようなやつが、客を襲える腕力と胆力を持ち合わせているかどうか、甚だ疑問だ。だいたい、魔法使いには猫ばかりだと言っていたのはお前じゃなかったか？」

別の意味でアーシュの顔が曇る。毎度毎度、痛いところを突かれる度に罪悪感を感じるなら、浮気なんて止めればいいのに。俺はため息を吐いた。

「アーシュさん、フェイオンさんも大丈夫って言ってるし、僕達先に行こうよ」

パレットはにこにこしながらアーシュの服の袖を引いた。行動は早ければ早いほどいい。

「もたもたしてると、勇者の宝剣売られちゃうかもしれないよ。ね」  
アーシュは俺の目をじっと見つめ、俺がてこでも動かないと悟ったのか渋々といった様子で頷いた。

「ん、分かった。ただし、長居はするな、すぐ来るんだぞ」

続けて俺の耳に顔を寄せ、小さく呟く。

「勇者の名に懸けて、忠告しとく。気をつける、油断するな」

真面目な声音に緊張感が混ざっている。俺は不安そうなアーシュを見上げて、頷いて見せた。

「大丈夫だ、アーシュ。すぐに合流する。パレット、お前の情報収集能力に期待してるぞ」

「うん、フェイオンさんがくるまでに終わらせとくよ」

そう言うtpパレットは、後ろ髪引かれていた様子で俺を振り返るアーシュを引きずり、酒場に向かって歩いて行った。

さて。蝋燭の灯りらしきものがちらつく店に向き直る。

「……嫌な感じなんかないけどな」

勇者の勘とやらを信じられない俺は、一度肩をすくめてドアノブに手をかけた。

一步店内に足を踏み入れただけで、空気が変わったのを感じる。足元から、微弱な魔力が体中を包んで、鳩尾の辺りがざわざわと騒ぎ出す感じた。嫌な感じどころか、俺にとってはアーシュに抱いているのと同様に快い。いい意味で落ち着かなくなる、抗い難い不思議な力。

外観から予想していた通り、店内はとても狭い。薬草や分厚い魔術書、杖、水晶、羊皮紙、蠟燭等が、木製の箱にぎっしり詰まっていたり、ささっていたり、テーブルやガラスケースに入っていた。その他見慣れない植物や昆虫の干物が天井からぶらさがっていたり、薄緑色の液体に浸かって瓶に入っていたりする。光源は、半ば商品に埋もれて存在するカウンター横の燭台しかない。だから、店の四隅まで灯りが行き渡っていない。そのせいで、不気味さが一層促進されている。

「いらつしゃいませ」

店の奥力ウンターの傍に立てかけてあった、血の色にも似た深紅の水晶が先端にはめ込まれている杖に目を奪われていると、極至近の背後から声をかけられた。切り裂かれた喉の奥から聞こえるような不気味な低音に、一瞬で全身に悪寒が走る。

「うっ、わっ」

あまりに突然過ぎて、俺は屈辱的な悲鳴を上げてしまった。慌てて後ろを振り返って身構える。

背の低い腰の曲がった老人が、杖を支えに立っていた。性別もよく分からない。夜の帳を思わせる深く暗い色のローブで顔と体が覆われていて、垂れ下った鉤鼻と皺の寄った口元しか見えなかった。

老人は、例のおぞましい声で短く笑い、口をにやりと三日月の形に持ち上げた。

「驚かせてしまいましたかの、お若い方」

「いえ、こちらこそ大声を出して申し訳ありません」

俺は治まらない動悸に忌々しさを覚えつつ、平静を装って答えた。この老人と対峙していると、言いようのない恐怖心に駆られ、命が危険にさらされているように感じる。

俺は後ろに下がった。と言っても、カウンターがあるので二歩以上下がれないのだが。とにかく、少しでもこの人物から距離をとりたかった。

「ひやつひやつひやつ、お若いの、そう恐れることはない。小生はただの道具屋店主に過ぎぬのだから。さて、何かお探しか、お若い方」

「特に探し物という訳ではなく、魔法使いの性で……」

喉が委縮して声が掠れる。俺の肩までしか身長がないのに、不穏な威圧感を発している店主に押し潰されそうで、体が震えそうになった。

本能がやばいと告げている。アーシュの勘は正しかったのだ。俺はドアに視線を投げた。一刻も早く脱出しなければ。

「……あの、俺、仲間を待たせているので、失礼します」

言い終わらない内に、俺の覚束ない脚は出口に向かい出す。全身を冷や汗と悪寒が襲い、頭がぼうつとして打つ倒れそうだ。

アーシュ……アーシュの傍に行きたい。

「まあ、そうお急ぎなされるな」

店内の中ほどまで進んだ時、俺の手首が強い力で握りしめられた。振りかえると、老人の枯れ枝のような手に、がっしりと掴まれている。とても老人とは思えない力だ。

俺は手を通して体中に染み込む嫌悪感と戦慄に、本格的に震え始めた。血の気が失せ、歯ががちがちと鳴る。怖い。

「は、はな、せ」

全体重をかけて逃れようとしても、老人の手はびくともしない。

俺は泣きそうになりながら、自由な方の手で印を結んだ。

「ひやつひやつひやつひやつ、無駄な足掻きはよしなされ」

言うことを利かない指先を何とか操り、咄嗟に思いついた氷魔法

の印を結び終える。手を老人に目がけて振りかざした。

「氷よ、千の槍と成りて敵を貫き通せ、氷槍っ」

無数の氷の刃が老人に降り注ぐ。

間合いなどなかったから、外すことはないだろうし、魔法耐性があるとは思うが、無傷という訳にはいかない。

氷片を避けるために閉じていた目を開ける。

が。

相変わらず不気味な笑みを張り付けた老人が、何事もなかったように立っていた。それこそかすり傷一つ負わずに。

「なっ」

俺は目を見開いた。おかしい、そんなはずはない。俺の思考回路は機能停止して、唯馬鹿みたいに目の前の光景を見ているしかない。「だから、無駄だと言ったはずだ」

そして俄かに、老人の声が若い男のものになった。体の輪郭がぼやけ、徐々に縦へと伸びて行く。俺の頭一つ上の位置でブレは治まり、ロープの影から魅惑的な唇が笑みを形作った。

「遠目で見た時より綺麗だ」

脚から力が抜ける。信じられなくて、怖くて、俺はその場に座り込んでしまった。

何がどうなっているんだ？ こいつは、どうして老人から若者になった？ こんな魔法、あるわけない。気が動転して男を見上げることしかできない。

男は片膝について掴んでいた俺の手首を離した。片手でロープを後ろに払う。その仕草に乗って、甘く芳しい香りが、俺の鼻孔を刺激した。

紫の髪と瞳を持つ、挑発的な眼光の男だった。何処かアーシュを彷彿とさせる切れ長の目は、見つめられた者全てを虜にするような艶やかさを秘めている。

男の長くしなやかな腕に、胴を引き寄せられた。さっきから呆けたように体が動かなくて抵抗できない。おまけに、男の動きがいち

いち優雅で、見とれているうちにそうなってしまった。

「や、やめろ……貴様は誰だ」

喉にも力が入らなくて、囁き声程度しか出せない。

男は空いている方の指先で俺の髪を弄び、くすくすと笑った。息がかかるくらい顔が近い。

「怖いのかい？ くつくつ、可愛いねえ。でも大丈夫、絶対傷ついたりしないよ。私はサラスだ。君の名前を覚えてくれるかい？」

サラスは囁くと、端正な眉を顰めてから俺の首筋に舌を這わせた。うつ、何をするつ、やめ、ろつ、変態っ

「変態とは心外だ。唯、切り傷ができていたから消毒したまでだよ。さあ、名前を教えて」

頭の後ろに手が回って、サラスの唇に触れそうになる。俺は何とか身を引いて、サラスの体を押しやった。

「ふう、流石に魔法使いは手強いな。せつかく思考鈍磨の香をたき込めてきたのだけれど、だめか」

残念そうに肩を落とすサラス。体が動かないのは香のせいだったのか。

「俺を、どうするつもりだ」

サラスの口の端が持ち上がる。

「分からない？ もちろん、私のものにする為だよ。……さあ、いつまでもここにいたら君のお仲間がやってくるかもしれないから、場所を移そう」

こいつはアーシュとパレットを知っているのか。なら、計画的な犯行ということだ。でも、何故よりによって俺なんだ。未だに理由が分からないし。

俺はサラスに抱き上げられながら、何とか声を絞り出した。香のせいか、瞼が重くなり始めている。

「貴様の、目的は……？ 何者、だ？」

直後。遠のく意識。瞼が完全に閉じた。耳元で甘い囁き声をする。「お休み、私の可愛い人」





勇者の勸と、まさかのまさか（後書き）

旅立ちとか言いつつ、旅立ってませんでした（汗  
今回も読んでくださりありがとうございます。楽しんでいただけ  
たら幸いです。

## 鳥籠の中に魔法使い（前書き）

苦手要素のある方はご注意ください。

## 鳥籠の中に魔法使い

「……きて……起きて、私の可愛い人」

ん、誰だ、この気色悪い台詞を吐くやつは……。アーシユはこんなに甘ったるい声じゃないし……。なんか、花の蜜みたいな香りもする……。魔力の波動も尋常じゃない……。

「つつーか、髪を愛撫するのを止めろっ」

俺は目をカツと見開いて、上半身をグワツと勢いよく起こした。あわよくば、誰とも知らない変質者に頭突きをお見舞いするつもりで。

しかし残念なことに、俺の意外に丈夫な頭は思いつきり空振った。どうやら俺の顔を覗き込んでいた奴は咄嗟に避けたらしい。ちっ、変質者のくせして、小憎らしい奴だ。

「ふふっ、威勢がいいことだな。思った通り、一筋縄ではいかなさそうな性格、そそられるよ」

俺はその妖艶な声音をはつきり聞いて、やっと思い出した。俺はこの得体の知れないサラスに誘拐されたんだった。

ベッドに寝かされていた俺の横に椅子を持ってきて座っているサラスは、白い法衣のような衣装を着ていて、面白い遊びを見つけた子供のような、嫌な笑みを浮かべてこっちを見ていた。魔術用品店で感じた恐怖を、俺は追体験する。瞳の奥に潜んでいる悪意に限りなく近い好意を感じとってしまい、体は勝手にサラスから逃げようとした。

でも、ベッドは紫の布を張り巡らしてある壁に横付けされている為、後退することができない。冷や汗が背中を伝い落ちて行く。恐怖で息が詰まり、でこぼこした壁にぴったり背を押し付けて、俺は膝を抱えて縮こまった。

「怖がらないで、傷付けたりしないと云っただろう？」

サラスは微笑むと、俺の方へ手を伸ばしてきた。白く繊細な指先

は何の力も持たないように見えるのに、俺は猛禽類の鋭い鉤爪を前にした小動物みたいな気持だった。いつ引っ掛けられてしまうのかと、びくびく怯えるしかない。

「さ、触るなっ」

悲鳴みたいな声を上げてしまった。圧倒的な魔力の波を全身に受け、今にも泣きそうだ。怖い、殺されるかもしれない。俺はこいつに絶対敵わない。

伸ばした手を下したサラスは、余裕の笑みを口元に浮かべ、愉快そうにくすくす笑った。

「鳥籠に入れられた小鳥のようだね。せっかく捕まえたのに、触ることができない」

こいつ、脳内どうなってるんだ？ アーシュの比じゃないぞ。

より一層手足を引っ込め、脱出できないかどうか、俺は周りに初めて視線を廻らせた。

部屋全体を悪趣味な紫の布が隙間なく覆っていて、家具と呼べる物は、びくついていて俺を乗せた大きめの寝台と、サラスが座っている椅子、一つしかない出口の横に置いてある黒い鍵付きの四角い箱だけだ。あと、煙がたっている香炉が四隅に一つずつ置いてあった。照明は一定間隔で壁に突き刺さっている燭台に灯された、心もとない光のみ。窓がないから、昼夜の区別がつかない。さっきまでいた魔術用品店とまるで同じ雰囲気だ。違うのは埃っぽい薬草の匂いでなく、香の芳香であること。魔力が心地よくなくて、脅威としか感じられないことだった。

そして、背中の壁の感触からすると、ここは普通の建物ではないと思われる。天井も、目測ですらはっきりと直線ではないことが分かるくらい傾斜していた。空気は冷たく湿っているし、風のうねりと反響する音が微かに聞こえる。

委縮した胃のせいで吐き気を覚えつつ、心底嬉しそうに俺を観察しているサラスに聞いた。

「ここは、地下か？」

サラスは頷いた。

「そう、君は勘がいいね。この状況で冷静な判断を下すなんて、益々惚れてしまったよ。まあ、随分と動揺はしているみたいけど」

「貴様、何者だ？　ここは何処の地下だ？　あの、属性無視の魔法は、何だ？」

「ふふつ、そう焦らなくても私は居なくならないよ」

いちいち腹の立つ物言いだが、何か皮肉る元気がない俺は黙ったままだった。

「私は君の同業者。と言っても、君とは違って合法的ではないけれど。ここは洞窟の地下、私の部屋だよ」

一度言葉を切ると、サラスは立ちあがった。

「少し待っていて」

そう言い残して、部屋を出て行く。鉄製と思しきドアに、鍵もかけなかった。

俺の手足を自由にしていることも併せて考えるに、どうやらここから脱出するのは容易ではないようだ。

「氷よ、我が意思に従い、刃となれ。氷剣」

印を結んでドアの方へ手を振った。

が、何も反応なし。この部屋もしくは場所全体に魔封じの効果が働いているせいで、俺は魔法が使えないらしい。

さらに、俺の愛杖まで没収されている。ローブの下に忍ばせていた緊急時用の短剣も、役目を果たすことなく、のこのこ見つかりやがっていた。

「ちっ、使えない武器め。持つてるだけ損したじゃないか。重いんだよ、これ。アーシュの馬鹿野郎」

くれたのはアーシュだが、勝手に持ち歩いているのは自分なのに、恐慌状態の俺は無意味に奴を非難してみる。不安なせいで独り言が止まらない。

ベッドから降りて、ぐるぐるぐる歩き回る。ドアには極力近寄らないように注意した。鍵をかけないのだから、それなりに危険

な反撃魔法が施してあるだろうからだ。怪我でもしたら逃げるところではない。

「あつ」

俺は四隅の香炉を目にし、急に非常に重要なことを思い出した。一番手近にあった香炉に、壁布を引き裂いて慌てて被せる。残りの三つも同じように覆い、ひとまず息を吐いた。香りからすると危険性は低いと推測できたが、また神経系の香に翻弄されたくはない。毒性乃至神経異常の香は濃厚な甘ったるいものが多く、そうでないものは甘くはあっても喉に絡みつくくらい重くはない。だが、徒勞であつても念には念をいれなければ。

俺は徘徊を再開した。

「あの二人、もしかして俺の存在忘れてたりしないよな。いや、パレットに限ってそんなことは……」

因みに、アーシユは忘却済みの可能性がある。

「いや、でもあいつは俺に忠告してくるくらい警戒してたし、きつと助けにきてくれる……筈」

部屋の中央で立ち止まり、無理やり自分を宥めていると、ドアが開いてサラスが戻ってきた。手には、大人の拳程ある琥珀をはめ込んだ杖を持っている。

やや落ち着きを取り戻していた体に、緊張と戦慄が戻ってきた。

部屋の奥に背を張り付け、最大限サラスとの距離をとる。

「さて、私の魔法について教えてあげる。でもその前に、当たり前だとは思うけど、魔法の原理は理解しているよね？」

サラスは俺に近寄ってくるでもなく、ドアのすぐ傍に立って言った。

武器を所持していない状態で、得体の知れない奴と向き合うことがこんなに恐ろしいとは思わなかった。手ぶらでさえ強い魔力が、杖を得たことでさらに増大し、魔力の滝壺に居るみたいに感じる。膨大な圧力が正面から押し寄せてきて、立っているのがやっとだ。

「ああ、もちろんだ」

震える声で何とか答える。

サラスは満足した笑みを浮かべ、蝋燭の淡い火を映し込んで輝く琥珀を見つめた。

「世界に存在する魔法の源は、自然界に由来する『火』『風』『水』『土』と、人間の真理に由来する『闇』『光』の二種類に分類される。大抵、魔法使いと言うと自然界に由来する元素魔法を操る者のことを指す。だから、君もこの元素魔法使い。ここまでは君も知っている通りだ」

話しながら、サラスはそれぞれの元素魔法を使い、杖で宙に赤、緑、青、黄の四色の五芒星を一つずつ浮かべた。そして、杖を指揮棒のように振り、薄暗い空間の中をくると踊らせた。やがて外周の円の一つが千切れ、するすると一本の紐になったそれらは、魚が水中を泳ぐように身をくねらせ、俺達の傍をぐるぐる回った。しばらくすると、それは円を描いて高速回転し、音もなく霧のように弾けた。空中に散らばったその小さな色の球は、互いに混ざり別々の色を作り、また分離することを繰り返した。刻々と移りゆくそれは、極彩色の花吹雪を思わせる美しさで部屋全体を舞い続け、思わず見とれてしまうくらい綺麗な様相を呈した。暫時、俺は恐怖を忘れ、静寂の円舞曲を楽しんだ。

「色は、人間の心理状態に少なからず影響を与えるんだ。青は落ち着くし、赤は意欲が高まる。どう？　少しは愉快的気分になってくれたかな？」

今まで鋭利な艶やかさを湛えていた紫の瞳は優しく光り、唇は緩やかな優しい笑みに持ち上がった。

正直、若干だが、心拍数が上がった。

俺は光速で視線を逸らした。危ない、危ない。頭を振って心を落ち着ける。たかが子供のご機嫌取りに騙されてはいけない。

「俺は絶対靡かないぞ」

意識して吐き捨てるように言い、これ以上下がれないのに後ずさ



った。ううつ、屈辱だ。アーシュのことを言えたもんじゃなくなってしまう。

「靡きかけたんだね。可愛いよ」

くすくす笑って、サラスはからかうように言った。まだ声が優しい。

「ち、違うつ、俺は別につ」

「違う？ どこが違うんだい？ 私は気分はどうって聞いただけなのに、君がそう言うってことは、そうだろう？」

な、なんだこいつ。アーシュと同等のサドか？ 嫌だ、そういうのはあいつだけで腹いっぱいだつ。

俺は自爆して楽になりたいと切実に思った。

「そんなことより、説明の続き、聞かせろよ」  
切羽詰まった俺。半ばキレて喚いた。

嫌だ、こいつ筋金入りのサディストだ。

「ふふつ、そうだね。そうしてあげるよ。後で嫌になるくらい……くすつ」

ひいいつ。なんだ、何なんだつ、全くつ。

不吉なサラスの笑みに、俺の血の気は音を立てんばかりにして引いていった。

「さて、君の緊張が解けたところで説明に戻るよ」

サラスは杖を振って空中の円舞を止めた。

そう言えば、どさくさに紛れて、俺の張りつめた糸みたいだった心身が、強張りを弱めている。まんまと奴の術中に嵌まってしまったというわけか。

俺は色々と癪だから、むつすりと押し黙った。

気付いているのかどうなのか、サラスは闇色の五芒星と、白く発光する五芒星を宙に浮かべ、話を再開した。

「次はこれ。この二つは高位魔法だから、私のようにある程度熟達していなければ扱えない。『闇』は人間が持ち得る負の感情や願望を糧として発動する。例えば怒りや悲しみといったものだね。『光』

はその反対、人間の明るい正の感情や願望が糧ということ。平穏や嬉しさ、楽しさといったもの。原則として、『光』だけは攻撃魔法として使えない。その代わり、回復や補助に向いているよ」

成程。属性魔法もこの二つも、使い手の意思によって攻守に使い分けることができるのか。ただし、『光』だけは負の側面、攻撃の性質を持たないから補助系統にしか使えないんだな。

「じゃあ、属性魔法のように、自然界という外側の力を引きだして変換するのと違って、自分の内側に働きかけて、それを力にするってことか？」

「そう。だからとても疲れるし、難しいんだ。無意識と意識、負と正とを、時々によって制御しながら使わなければいけないからね。揺るぎない精神力を備えた者以外が無暗に使うと、最悪、精神崩壊してしまう」

サラスは杖を無造作に振って、二つとも五芒星を消した。

「これで、私があのお店主にどうやって為りすましたか、分かっただらう？」

俺は頷いた。サラスは闇魔法を使って、人間の変幻願望を糧に変身した、というわけだ。自分以外の者になりたいという願いは、しばしば嫉妬や劣等感から生まれ出でるものだから。

「では、私ばかり答えていては不公平だろう？　そろそろ、君の名前を覚えてくれないかい？」

壁に沿って立っている俺から見て左側、ベッドの傍にある椅子に座って、サラスは脚を組んだ。見据えてくる顔が余裕泰然としていて、ム力つく。

俺は安全確保の為、じりじりと間合いをとった。

「俺の、名前は……」

生まれてから十九年の内で、最も悲惨で意欲が萎えるような単語を、俺は必死になって記憶の底からさらい出そうと試みた。だからと言って、自分の尊厳を損なわないものでなくてはならないから、一苦労だ。

「君の名前は？」

サラスの瞳が、俺の幼稚な抵抗をすでに見破っているように感じて、内心気が気じゃない。

俺は咄嗟に浮かんだ言葉を、口々に考えもせず口にした。

「俺は、しいおsぎおsjこいsjggjjsljふいおshこいjffjlk sjgljjl sjglk sjglhごりhこいsだっ」

堰を切ったように口を突いて出てきた言葉は、単語ではなかった。なんだか訳が分からないことを早口で捲し立ててしまった。

ああ、どうしよう。サラスが立ちあがってこっちにくるんだけどっ。

怖い、笑顔が死ぬ程怖い。

俺の目の前にきたサラスに、壁に追い詰められた。手首を掴まれ壁に押し付けられて、身動きできない。俺は馬鹿げた自分の行為のせいで、泣くに泣けない自業自得という緊急事態に陥ってしまった。ああ、俺の馬鹿野郎。

サラスはもう笑みを消していて、その剣の切っ先に似た怜悯な目が、俺を捕らえて離さなかった。目を逸らしたら、やばいことになりそうな気がする。さっきまで消えていた威圧的な魔力の波動も、再び全身に迫ってきた。

「ねえ、君ふざけるのは止めてくれないかな。無理やり聞き出してもいいんだよ、私はね」

低められた声音に、怒りの感情が混ざっていた。治まっていた恐怖が、他の種類の危機感を伴って、また頭をもたげてくる。

「ま、待て。言う、言うから。離してくれ」

掴まれた手を必死で自由にしようと頑張ってみたが、サラスは決して非力ではなかった。びくともしない上に、拘束されているところが痺れるくらい痛い。

「なら、早く教えて。名前は？」

「フェイ、オン。……フェイオンだ」

唇が震えて、うまく口が回らなかった。何度も言い直して、やっとそう言えた。

「フェイオン、か。いい名前だよ。呼び甲斐がある」

耳元で囁かれた声は、ぞっとする程艶めかしい。勝手に目じりに涙が浮かんだ。

サラスは一瞬顔を顰めてから、口の端を持ち上げ、目を細めて言った。

「私が怖いかい、フェイオン。泣く程、嫌なの？」

あまりに悪魔的な微笑が恐ろしくて、本格的に俺は泣き始めてしまった。

怖い、アーシュ、助けて。

「ふふっ、可愛い。もっと泣いてほしいな」

「嫌だ、はな、せつ。やめろっ……んっ」

俺が怖がるさまを楽しんでいたサラスは、掴んでいた手首を片方離し、空いた手を頭の方に持ってきて、いきなり強く口付けてきた。舌が絡めとられて、息が苦しい。一層、涙が溢れた。

気持ち悪い。嫌だ、嫌だっ。

突き放すこともできないまま、俺はずるずると床に引きずり降ろされてしまった。

「私のフェイオン、もう逃げられないよ」

ゆっくり俺の髪を撫でながら、サラスはくすくす笑った。床に完全に組み伏せられる。

「紫はね、欲情を促す色でもあるんだよ、フェイオン」

しゃくり上げてしまい、ままならない呼吸を繰り返しながら、俺はさらに恐怖で息止まってしまふんじゃないかと思った。

今では解放された両腕で、サラスの肩を押しても無駄だった。

俺の心に諦めの気持ちちがのさばり始める。もう、だめかもしれない。

俺はとうとう抗う力も気力も尽き、全身を弛緩させた。

「アーシュ……たすけ、て……」



## 鳥籠の中に魔法使い（後書き）

またぐだぐだ進みませんでした（- - ;）  
更新も滞ってしまいましたね（・|・ ;）

今回も読んでくださりありがとうございました。楽しんでいただけ  
たなら幸いです。

どうでもいいですが、サラスが個人的にアウト。作者なのに……。

## 小鳥と二人の変質者（前書き）

苦手要素のある方はご注意ください。

## 小鳥と二人の変質者

「頭あゝっ、大変っス、頭あゝっ、火急の事態っスっ」

俺が食われることを覚悟して、目を閉じた時だった。

騒々しい足音が複数、この部屋の前で止まり、打ち破れるんじゃないかというくらい激しくドアが叩かれた。

助かった……。俺はほっと胸を撫で下ろした。

「ふう、せつかくおいしく頂こうと思ったのに」

サラスは眉間に皺を刻み、不機嫌そうに呟いて俺から身を離れた。立ち上がり際に伸びてきた手が、俺の頬に触れる。

「少しの間、お預けみたいだ。ここで大人しくいい子で待っているんだよ、フエイオン」

急いで乱れた服を手繰り寄せ、俺は起き上がった。名残惜しように視線を送ってくるサラスから、もうできるだけ早く遠くに逃げた。涙はまだ止まってくれない。拭っても拭っても溢れ出してくる。

サラスはこっちに顔を向けていたようだが、表情は曇って見えない。小さい嘆息が響き、ドアを勢いよく開ける音がした。

「あだっ」

ゴスっという鈍い音が鳴り、同時に誰かの悲鳴が聞こえた。座り込んでいる俺の位置からは、サラスが障害になって声の主は見えない。というか、元々涙のせいで視界が酷く悪いから、見えたとしてもぼやけていたのだろうが。

「何事なんだ。私は今楽しみの最中なのだけど」

氷点下の低音で、サラスが言うのが聞こえた。すると、一斉に「すいませんっ」という粗野な声が合唱がする。

「すいません、頭。しかし、緊急の用があったものですから」

「で、さっきから聞いているじゃないか、用ってなんなんだ？」

イライラした様子のサラスが、声を荒げた。

「はいっ、頭。つい今しがた、赤髪の怒り狂った青年と引きつった



表情の茶髪の少年が、アジトに押し入ってきたので応戦したんですが、おれ達じゃまるで歯が立たないもんで」

「……アーシュっ」

思わず息をのみ、小さく名前を叫んでしまった。嬉しくて、嬉しくて。

やっぱりきてくれたんだ。アーシュとパレットがきてくれたっ。

石でも詰め込まれたように苦しかった喉が、すうっと楽になっていくのが分かる。呼吸も大分落ち着いた。

涙がほぼ止まってくれたおかげで、サラスやその他の状況を把握できるようになった。苦々しい顔のサラスは、息を吐き出し、頭を振った。

「随分お早い到着だね。もう半日くらいは余裕があると予想していたんだけど。どうやら計算違いだったようだな」

「お願いしますよ、頭。ちゃちゃっと、頭のお力で片づけて下さいませんか？」

見るからに盗賊といった風体の男三人の内、ひよろつと背の高い痩せた男が、主人の反応を窺いながら、そう言った。首を絞められた鶏のように耳障りな声だ。俺は思わず耳を塞いってしまった。それくらい、酷い。

サラスがちらつと俺を振り返った。性懲りもなく、俺は怯えて委縮してしまう。まだ、立てる程には気力が回復していない俺。惨めに蹲っているしかない。アーシュとパレットが、すぐ近くにきているというのに。

「フェイオン、続きをしようか」

「えっ」

「ね、そうしよう」

なんだと。

俺は耳を疑った。こんな状況で、こいつは何を考えてるんだっ。

やばい、こいつ、アーシュの比じゃない変態だ。

動揺する男達に目もくれず人払いをしたサラスが、こっちに歩い

てきた。

「や、いやだっ、くるなっ」

座り込んだまま、必死で後ろに後ずさる。せつかくアーシュが助けにきてくれたのに、こんなところでやられたくない。視界がまた不明瞭になった。

「君のその大切なアーシュとやらに、分からせてやるんだよ。フェイオンが私のものだってことをね」

床に押し倒され、サラスの唇が俺の首筋を這った。その慣れない感触に、背筋がぞつとする。

「や、だ、嫌だっ、アーシュっ」

俺の体を弄る手つきが、死ぬほど気持ち悪い。アーシュ以外に触れられるなんて、想像するだけで吐き気がするのに、実際やられてみると、嫌悪感の前にひたすら怖かった。

「私の名を呼べ、フェイオン」

涙が際限なく頬を伝い落ちる、熱い温度の他は、何も感じられなかった。一刻も早く逃れたくて、怖くて、嫌でたまらなくて、頭の中が真っ白だ。

ただ、アーシュに抱きしめてもらいたい。強く、離さないで欲しい、そう思った。

「アーシュっ、早く、きてっ、アーシュっ」

と、突然鼓膜がだめになりそうな盛大な破壊音がした。

続いて鉄製の頑丈な筈のドアが、ベッドの方へ吹っ飛んで行く。

これまた派手な激突音と共に、壁に両方めり込んだ。

サラスは体を俺から離し、口元を持ち上げるのが分かった。でも、俺はそれどころじゃなく、元ドアの位置へ視線がくぎ付けになった。歪んだ鉄製のドア枠しか残っていない入口に、恋い焦がれた姿が見える。俺はとうとう、泣き声を漏らしてしまった。

「フェイっ」

空気を刀剣で切り裂くような、鋭く激しい叱声が響き渡る。

愛しい声が、俺の涙に拍車を掛けた。

アーシュ、俺は、ここだ。ここに居るから、抱きしめて。

「アーシュっ、アーシュっ」

俺は両腕をアーシュの方に伸ばした。

「フエイっ」

すぐさま駆け寄ってきてくれたアーシュに、俺は手を強く引かれ抱きしめられた。熱い体温と安心する匂いに、身を任せる。もう、何も怖くなくなった。

「フエイ、大丈夫かつ。悪い、もっと早くきてやれば、こんなことには」

アーシュは精悍に整った眉を歪め、普段になく真剣な眼差しで顔を覗き込んでくる。頬を大きな掌で包み、俺の眦を濡らす涙を親指で拭ってくれながら言った。

「遅い、んだ、よ。馬鹿、アーシュ。隣の国、まで、探しに行つて、たのかっ」

俺は安心したおかげで、泣きながらも皮肉を言うことができるようになった。

アーシュの優しい手が、髪を梳いて撫でてくれる。それが堪らなく心地よかった。

「マジで悪かった。怖かったな、よしよし」

「うう……っ、ぐすっ」

幼児をあやす時のような台詞に少々不満を持ったが、そのどうしようもなく包容力のある柔らかい声音と掌の前には、流石の俺も抗議などできない。勇者らしく見えてきたアーシュの胸にしな垂れかかって、俺はぐすぐすと鼻を鳴らした。

束の間の幸福の後、寄り添っていた体を離して、アーシュは小さく微笑んだ。そして、俺の額に唇を触れ、静かな口調で言った。嵐の前の、と言い足してもいい種類の静けさだ。

「後でちゃんと慰めるから、今は少し待ってくれ。ぶっ飛ばさなきゃなんねえ奴がいるからな」

一瞬、黄緑色の瞳の奥で怒気のこもった火が燃えた。

ああ、アーシュが怒っている。

俺は昔、酒場で同村の男に言い寄られた時のことを思い出した。滅多なことでは本気で怒りを表さないアーシュが、人目も憚らずその場で男を半殺しにしたことがあるのだ。その時の瞳も、確かな風だった。

服装を手早く整えてくれたから、アーシュは俺に隅に避難しているように言って、立ち上がった。雰囲気からしても明らかに憤激している。立ち上がり際に酷い歯ぎしりの音が聞こえた。

サラスを殺してしまうかもしれない。俺は不安になった。俺は心のどこかで、アーシュに人殺しになってほしくないと思っているんだろうな。

余裕の笑みを浮かべて壁に寄り掛かっているサラスに対峙して、アーシュは得物の長剣の柄に手を掛けた。

アーシュは俺に背を向けた位置にいるから、その表情を知ることができない。

「アーシュ、こいつ、高位魔法を使うぞ。気を付けろ」

そつと囁くと、アーシュは振りかえらずに頷いた。

この狭い空間に、緊張が張りつめる。

「君が、アーシュか。なかなかの男前なんだね。おまけに腕も立ちそうだ。私はサラス。フェイオンを攫った犯人だよ」

「んなの、説明もいらねーよ。フェイを犯そうとしてたもんな、あん？ 覚悟はできてんだろーな、下衆野郎」

怨念のこもった低音に、体がびくつと僅かに跳ねた。何も俺が言われているわけでもないのに。

凄みの効いた声にたじろぐことなく、サラスはふふつと愉快そうに笑った。

「嫌だね、下品な蛮族は。こんな男に束縛されているなんて、可愛そうなフェイオン。これは益々私のものにしなければいけないね」

「てめえ、自分のことを棚上げしてんじゃねえよ。いきなりフェイ

を誘拐した拳句、無理やり強姦したんだぞ、そつちこそ正真正銘の蛮族じゃねえか」

アーシュは心底腹立たしそつに声を荒げた。確かに、サラスは他人のことを言えた立場じゃない。

それを受けたサラスは眉を顰め、不快を露わに言葉を吐いた。

「強姦なんてしてないよ。全く、フェイオンの肌に少し触れただけだというのに、人のことを色魔みたいに言わないでくれないか」

この言葉に、アーシュが激昂した。ブンツと剣先を勢いよくサラスに向けて、怒鳴り散らす。

「ざっけんなつ、フェイの体に触っていいのはこの世界でオレだけだつ。フェイのあんな表情、こんな声、そんな感触を味わっているのはこのオレだけなんだよつ。可愛くてちよつと卑猥なフェイを堪能する資格がある男は俺だけなんだよつ。つーか馴れ馴れしくフェイの名前口にすんな、変態っ」

「失礼だな。変態なのは君の方だろう。ふつ、本当におつむの弱い奴だな、君は。その都合が良過ぎる思い込みを捨ててくれないと、私のフェイオンが不憫でならないよ。それに、私はもうフェイオンの <sup>ビ</sup>や <sup>ビ</sup> を味わい済みなんだけれどね」

「……てめえ、殺す」

何を言ってるんだ、こいつ等は。

俺は大声で応酬される会話の内容に、可能なのかどうか分からないが、全身の血の気が引くのと同時に、頭に血液が洪水の如く駆け上がったのを感じた。

どさくさに紛れて何言いやがってんだ、こいつ等。

俺の体は委縮していたのを忘れ、ものすごい勢いで馬鹿勇者のところへ移動した。もう助けられたことなんか記憶にない。

俺はアーシュの手から剣を奪い取った。

「わっ、フェイ、何すんだよ」

驚くアーシュに目もくれず、俺は剣を引きずりながら変態計二人の間に無言で立った。深呼吸をする。

「貴様等、さつきから人のことを玩具か何かのように……。おまけに、恥ずかしいことを大声であーだこーだうーだよーだと、いい加減にしるよ」

俺は震える声を抑えながら言い終わると、まずサラスの方へゆらりと近付き、さつきまでの余裕を失って呆気に取られているその横っ面を引つ叩いた。

「な、何をっ」

僅かによるめいたサラスに最後まで言わず、続けざまに剣の平で後頭部を強打した。鈍い嫌な音がして、サラスが床にぶっ倒れる。俺は次にアーシュを振り返った。

「フェ、フェイ？ いきなりどうしたんだよ？ ってーか、目が据わってんだけど、マジ怖えんだけど、フェイさん？」

額から汗を流し、じりじりと後退しながら、怯えた風にアーシュが呟く。威勢のよかった時が、遠い昔のことのように思える。

俺は剣を振りかざして犯行に及んだ……。

「……成程。それでこの二人はフェイオンさんによって成敗されたんだね」

好色漢二人を黙らせて暫くの後、血生臭さ漂うこの部屋に、パレットがひよっこり顔をだした。俺がことの次第を話して聞かせるとパレットはうんうんと頷いてアーシュの傍に屈み込んだ。死んだように横たわっている奴の耳を引つ張って、「もしもーし」と言つては反応が無いことを確かめ、面白そうに遊んでいる。

俺はサラスの服を漁り、鍵束を探り当てると、部屋の隅に置いてあった箱の前にしゃがんだ。片っ端から鍵穴に捻じ込み、鍵穴に合う形を探した。

「何やってるの？」

アーシュに飽きたのか、パレットが隣にきてしゃがんだ。俺の手中の鍵束に気が付くと、途端に嬉しそうな表情になる。流石元盗賊。

きつと昔の血が騒ぐのだろう。

「解錠なら僕に任せてよ」

「できればそうしたいんだが、この箱は魔法がかかっているから、専用の鍵じゃないと開かないんだ。パレットが開けられたら早く済むんだけどな」

パレットは一流の盗賊だ。殊更解錠術が優れていて、大抵の鍵ならば遅くとも二十秒以内に開けてしまう。がつくりと肩を落としたパレットの肩を叩き、俺は地道な作業に戻った。

「そういえば、どうして俺がここにいると分かったんだ？ 手がかりなんてなかったはずだろ？」

十個目の鍵を試しながら、俺はふと不思議に思っただけ。ずつと緊迫していて思い当らなかったが、平静を取り戻したらやっと気付いた。

パレットは「ああ、それはね」と言っただけで話し始めた。

「フレイオンさんと別れて酒場で情報収集してたらね、アーシユさんがやっぱりフレイオンさんが心配だと言って落ち着かないみたいだったから、ある程度聞き込み終わった時にあの魔術用具店に引き返したんだ。それで、僕達は店に入れないからドアを何十回もノックしたんだ。でも誰も出てこなかった。それで痺れを切らしたアーシユさんが、ドアを蹴破っちゃったんだ。勿論対不法侵入用魔法が作動して、炎とか氷とか色々降ってきたんだけど、何とかかわして奥に進んだら、店主のお爺さんが倒れてるのを見つけてね、揺り起して話を聞いてみたら誰かに襲われて気を失ったって言ったから」

俺は十五個目の鍵を鍵穴に突っ込みながら、成程と頷いた。

「俺に何かあったと推測したんだな。それにしても、よく警備隊に引き渡されなかったな」

パレットはあははと軽く笑い、また続きを話し始める。

「まあ、最初は僕達が犯人だと勘違いされて大変だったんだけど、違っただけを信じてもらった後は、話が早かったよ。店内に僅かに残っていた香りに店主が気付いて、それが盗賊の住んでいる森に

しか生息しない植物の香りだっ て教えてくれた。神経系の薬草で、通常はすり潰して麻酔に使うらしいんだけど、香として使うと催眠効果があるんだって。だから、もしかしたら盗賊と関係があるのかなあと思っ てここに辿り着いたんだ。他に手がかりもなかったし、森に入っ て店主に聞いた薬草を見つけたから、とりあえず調べてみるしかないなっ てことになっ たんだ」

「そうだったのか。パレット、助けに来てくれてありがとう。二人が来てくれたと分かった時は、すごく安心した」

照れた様子のパレットに微笑んで、俺は心から礼を言っ た。本当に、二人がいてくれてよかった。

そういえば……。

二十個目の鍵を機械的に突っ込んで、今度は周りが静かすぎることに気付いた。盗賊のねぐらに押し入っ たというのに、騒がしさとは程遠い静寂に包まれている。唯一音がすると言えば、俺ががちゃつかせている鍵だけだった。

「なあ、いやに静かすぎないか」

すると、こともなげにパレットが苦笑して言っ た。何処となく、温かみを感じられる声音だ。

「ああ、あのね、アーシュさんがフェイオンさんを探しながら、一人残らず倒しちゃっ たんだよね。勿論、殺してはいないけどさ。何かアーシュさん、まるで鬼神のようだったよ」

俺はその場面を想像してふっ と笑っ てしまっ た。馬鹿にして笑っ たのではない。俺を必死で助けようとしてくれたことが、何だかとても嬉しくて。

「本当に、アーシュさんもフェイオンさんも、お互いが大好きなんだね」

微笑みと共に添えられたパレットの言葉に、かあっ と顔が熱くなっ た。どうも人からそういうことを言われると恥ずかしい。特に、真面目に言われると。

俺は照れ隠しに二十四個目の鍵を力いっ ぱい回した。



カチャン。

「あつ」

二人同時に、声上がる。箱の鍵が開いた。

パレットと顔を見合わせ、俺はまた箱に視線を落とした。割と重い蓋ゆっくりと押し上げる。

「あれ、これってフェイオンさんの」

中身を覗き、パレットは少し残念そうな顔になる。無理もない。魔法の箱に入れてまで大切にしているものが、俺の愛杖とアーシュからもらった短剣だったのだから。

俺は短剣をローブの下に隠し、杖を取り出して箱の蓋を閉めた。

パレットがあまりにがっかりした様子だったから、俺は何故か責任を感じてしまった。お宝だと思ったものが、俺の武器だったなんて、お粗末すぎるオチだよな。

あつ、そういえば。

その時、俺は天啓のように重大なことを思い出してパレットの肩を叩いた。眉間に皺を寄せて萎れているパレットの顔がこつちを向く。

「勇者の宝剣って見つかったか？」

パレットの瞳がまん丸に見開かれて、瞬間、しょぼくっていた顔に輝きが戻った。がばつと立ち上がって、俺のローブの裾をぐいぐいと引っ張る。

「うん、あつたよっ」

きつと俺もパレットと同じ表情になっているだろう。先程までぼんやりしていた視界が、霧が晴れるように鮮明になった。

「よく見つけたな、パレット。どこにあつたんだ？」

俺が聞くと、パレットは飼い主に褒められた犬の如く目をきらきらさせ、嬉しそうに声を弾ませた。

「あのね、アーシュさんが奥にどんどん進んで行っちゃうから、フェイオンさんは任せて僕はいざという時の為に脱出口とか探してたんだ。そしたら、この部屋の少し先の方に小部屋があって、そこに

それらしい宝剣があったよ。アーシュさんを起こして、早く取りに行こうよっ」

「ああ、そうしよう」

俺はパレットの背を称賛の意を込めて叩き、未だ気を失っている勇者の隣に膝を付いた。

## 小鳥と二人の変質者（後書き）

更新が大幅に遅れ、申し訳ありません。m（――）m<  
楽しみにしてくださっていた方、待っていて下さってありがとうございます。

泣くほど励みになります。  
今回も読んでくださり、ありがとうございます。楽しんでいただけたら幸いです。

**勇者の宝剣と、夜の打ち明け話（前書き）**

苦手な要素のある方はご注意ください。

## 勇者の宝剣と、夜の打ち明け話

「……」

「……」

地下にしては天井が高く比較的広い部屋の中央に、仏頂面のアーシュと余裕の微笑を浮かべているサラスが向かい合って立っている。そして、二人を取り囲むようにして、優に四十人を超える盗賊、俺とパレットがその様子を見守っていた。部屋にはピンと張りつめた糸のような緊張感と、神妙な雰囲気満ちていて、皆固唾を呑んで中央を注視している。

と。心底嫌そうな表情で押し黙っていたアーシュが、額に手を当てて深い溜息を吐いた。

「……納得いかねえけど、フェイの頼みだ。水に流してやるよ」

ゆつくりと歯切れ悪く言葉を紡いだアーシュは、「これでいいだろ」とばかりに人垣の最前列、アーシュの真横にいる俺の方を向いて肩をすくめた。

俺はこくりとアーシュに頷いて、今度はサラスに視線を向ける。

それを受けて、涼しげな笑みを一層深めたサラスも口を開いた。

「そうだね、ここはフェイオンに免じて、私も溜飲をさげよう」

この言葉で、空間の緊張感がふっと弛んだ。俺も内心ほっとする。アーシュが盗賊全員をしばいたことと、サラスが俺を誘拐したことを穏便に纏める為に、関係者全員の前で和解しようと提案したのは、パレットだった。ことの発端はサラスにあるとしても、これ以上の面倒は勘弁してほしかった俺は早々に賛成したのだが、どうにもこうにもアーシュが断固として拒否するものだから、結構な時間がかかってしまった。ここまでくるのに、かれこれ二時間は浪費している。まあ、アーシュが俺が被った被害に対して憤慨するのは最もだし、それを俺も嬉しく思っただけでいいのだが、何せこのままではことが進まない。

それに、俺達は勇者の宝剣をどうにかして譲ってもらう必要もあるのだから。

俄かに騒ぎ出した盗賊達を横目に、アーシュが急いで俺のところへ戻ってきた。やはり不機嫌そうに眉を顰めて、何か言いたげに口元を歪めている。俺を見る目が酷く複雑そうだ。黄緑色の瞳が、僅かに陰りを帯びて沈んでいる。

「フエイ、本当によかったのか？ お前、もう少しであいつに……」

俺は人差し指でアーシュの唇に封をするように触れ、微笑して首を左右に振った。アーシュの表情は一層険しくなったが、もうそれ以上は何か言うことはなかった。

代わりというわけでもないだろうが、口に添えていた俺の指を取って、力なく頭を垂れて目を伏せ、懺悔するように唇を落とした。

その姿が異様に神々しい美しさで俺の胸に迫り、一生このアーシュを忘れないだろうと、悟るように感じた。

「アーシュ、お前が落ち込まなくても……」

あまりにアーシュがらしくない行動をするものだから、俺は戸惑ってしまった。さっきのように、怒鳴り散らしてキレる方がよっぽどアーシュらしいし、正直を言う対応にも困らない。

今まで付き合ってきて、こんな風に傷つくアーシュを見たのは、過去にたった一回だけだった。それもずっとずっと幼い頃の話で、原因を思い出せないくらいだ。それでも、今みたいに苦しそうな表情をしていたことだけは記憶に刻みついている。確か、これも俺に関することだった気がする。

と、急に誰かにローブの裾を引っ張られて、俺は追憶の底から意識を掬い上げられた。横を向くと、パレットの満面笑顔が目映った。

ああ、パレットの笑顔はこっちも元気にしてくれる。俺は微笑を返して首を疑問の形に少々傾げた。

「どうした？」

「あのね、今勇者の宝剣を持ってきてくれるみたいだよ。サラスさ

んがお詫びに何でもくれるって言うから、僕勝手に言っちゃったけど、いいよね？」

「そうか、案外簡単に話がつきそうだな。パレット、ありがとう」  
何だか、旅に出てからパレットにお世話になりっぱなしだ。俺は改めて自分もしっかりしなければ、と思った。

「あはは、今日は沢山褒めてくれるね、フエイオンさん。僕も遣り甲斐があるよ」

ニコニコと笑うパレットは、俺とアーシュの鎮静剂的役割を担ってくれているように感じる。パレットがいるだけで場が和やかになるから、喧嘩をしても馬鹿らしくなってしまう。険悪になつているより、楽しく過ごしていた方がどれ程いいか、そういうことを忘れないように、互いに思いやることが大切なんだと教えてくれているようで、たまに自分よりも大人に見えることもしばしばだ。

「フエイ、パレットのことばっか褒めないで、オレのことも褒めるよな。ずるいだろ」

俺を背後から抱きしめて頂垂れていたアーシュも、いつの間にかいつもの調子を取り戻して、俺に体重をかけてきた。

「うっ、アーシュ、俺は非力なんだから、やめろっ」

内心ほっとしつつ、俺も魔法使いの意地を見せる為に不必要に頑張る。だけど、本当のこと言っただけかなり辛い。アーシュは俺より頭一つ分背が高いし、図体もでかいのだから。

「あははっ、アーシュさん、フエイオンさんが潰れちゃうよ」

と、俺達が場所も状況も考えずにふざけていると、サラスが盗賊達の間を縫ってこちらに向かってきた。両手に一振りの剣を持っている。

サラスは俺達の前まで近づくと、ふっと笑ってそれを差し出した。俺はその装飾の緻密さと厳然たる美しさに、一瞬呼吸を忘れてしまっただけで心奪われた。

柄部分は金色で龍の形を模しており、胴体部分の途中から二頭に分かれてそのまま鏑になっている。瞳には赤い宝石が埋め込まれて

いて、手には緑色の宝石が握りこまれていた。鞘はきらきらとそれ自身が光を放っているとは思えない白銀で、絡まりあう稲妻のよ  
うな模様がびっしり彫り込まれている。やや広い剣幅を持ち、全長  
もアーシュくらい身長がないと引きずってしまいそうなくらい長い  
その宝剣は、触れるのを躊躇わせる、もつと言えは畏怖の念さえ起  
こさせる波動を放っていた。これは魔力を注ぎ込まれた魔法剣だ。  
勇者の装備としては申し分ない。

どうやら見とれていたのは俺だけではないらしい。アーシュとパ  
レットもそれぞれ口を開けて、憑かれたように一心に宝剣を見つめ  
ていた。

「これが勇者の宝剣だよ。美しかろう」

サラスがうつとりと目を細めて溜息を吐くと、アーシュは首肯し  
て神妙な声音で呟いた。

「持ってみてもいいか？」

「どうぞ。だけど気を付けて。相応しくない者が鞘から抜くと、そ  
の者に絶え間ない災厄と凄絶なる不運が降りかかると言われている  
からね」

俺はその言葉に一方ならぬ不安を覚えて、咄嗟に宝剣へ伸びたア  
ーシュの腕を掴んだ。息が苦しくて、体が震える。もし、アーシュ  
が相応しくないと判断されたら？ だって、そもそもこの職業にな  
った理由が理由だし、特段勇者らしいこともしていない。アーシュ  
にそんな呪いがかかったらどうしよう？ アーシュがもし、命を落  
としてしまったら、俺は……。

アーシュは伸ばしかけた手を止め、俺の方を見下ろした。腕を指  
が白くなるくらい強く掴んでいる俺の手に、自分の大きな手を重ね  
て、心中を読んだように優しく微笑んだ。

「大丈夫だ、フェイオン。俺は真正正銘の勇者だぜ。ほら、落ち着  
けよ」

きゅっと握ってくれた手がとても温かくて、一瞬俺は泣きそうに  
なった。本当はこのままアーシュの腕を押さえていたかったが、そ



ういうわけにはいかないことも承知している。この貴重な勇者装備を取り逃したら、魔王と対峙する時に絶対的に不利なことは明白だ。どっちにしろ、俺達に選択の余地はない。

俺は恐る恐る手を離れた。

アーシュは二ツと口の端を持ち上げて笑うと、宝剣に向き直ってその豪華な柄を握った。サラスの手から慎重に持ち上げて、鞘にもう一方の手をかける。

俺の心臓が煩く鳴りだし、体が冷たくなっていくのを感じた。隣に立っているパレットが、微かに息を呑む音が聞こえる。

今や、部屋の中は人口密度に反比例して、水を打ったように静まり返っていた。

一呼吸置いて、アーシュは宝剣の鞘を引き抜いた。

僅かな音を立てて、スラリと姿を現した刃は、鞘と同じく自ずから眩く輝いていた。闇を一掃し、邪気すら遠ざけることができそうな神聖な光に、俺を含めほとんどの者が目を覆っただろう。

程なくして白光が収束すると、やっと俺は目を開けられるようになった。

真っ先にアーシュを振り仰ぎ、何でもなさそうに宝剣を見やっている様子を確認して、ほっと息を吐いた。アーシュは本当に勇者だったみたいだ。失礼だが、俺はやっとここでアーシュの職業が勇者だと認めた。

「アーシュ、大丈夫か？」

それでも心配で声をかけると、アーシュは剣を収めてサラスに返した。俺の方に向き直ったアーシュは、ちょっと肩をすくめて見せて、悪戯っぽく口元に笑みを浮かべた。

「この通り、何ともねえよ。実際拍子抜けしたな。全然、普通の剣と変わんねえんだから」

俺は脱力して肩を落とした。何だか一気に安堵と疲労が押し寄せ

てきた。

サラスはふむふむ、と一人頷いていたが、やがて例の泰然とした微笑を湛えてアーシュに言った。

「私の見立ては外れていなかったようだ。君が今回の勇者なんだね」  
アーシュは眉を顰めて不満そうな声をだした。

「見立てってなんだよ」

「フエイオンに街中で目を付けた時、隣を歩いていた君から強い波動を感じたんだ。で、これはもしかすると、と思ってたんだよ」

俺もふと思いついてサラスに尋ねた。

「ずっと疑問だったんだが、お前は高位の魔法使いだろ？ どうして盗賊の頭領なんてやっているんだ？」

サラスが尋常じゃない魔力の波動を身に秘めていることは、再三に渡る恐怖体験で確認済みだ。ここまで力のある魔法使いが盗賊の頭張っているなんてどう考えてもおかしい。大抵の高位魔法使いは高齢なことが多い為か、自宅でひっそりと薬草なんか研究しながら暮らしている。そして必要とあらば国に召し上げられて働くこともある。勿論、高給取りなのは言うまでもない。サラスのような野の魔法使いは珍しいのだ。

俺の質問にサラスは「ああ」と軽く頷くと、実にいい笑顔で答えた。

「家に引きこもって詰まらない薬学ごっこなんて、私は真つ平なんだよね。盗賊をやっていると暇つぶしにはなるしお金も儲かるし、いいことだらけなんだ。国に仕えるのは考えられないし。もう唯の魔法使いになんて戻れないよ」

何となくその気持ちが分かる気がした。俺だって家にいるより外で働く方が好きだ。自由奔放になれる盗賊はサラスにとってなかなか魅力的なのかもしれない。盗賊がいいものか悪いものかは置いて。

「おい、てめえ、盗賊だったら勇者装備とか魔王の情報の一つや二つ知ってんだろ？ 教えるよ」

アーシユは何故か偉そうに腕組みをして、サラスを睨んだ。まだ俺のことで蟠りを抱えているみたいだ。

サラスはちつとも堪えていない様子で微笑むと、「まあね」と頷いた。

「勇者装備については、残念だけどこの宝剣だけなんだ。鎧とかは自腹ってこと。まあ、頑張つてよ。魔王については君達が知っていること以上は教えられないな。巷に流布している噂しか私も知らないんだ」

俺とパレットに向かって「ごめんね」と謝るサラスは、アーシユを全く見なかった。仲直りは一生無理なんだろうな。俺は二人の様子をみて相容れないものを感じとった。

「色々あったが、ありがとう。宝剣が手に入っただけでも大収穫だった」

そろそろお暇しようと俺が口を開くと、サラスは眉を寄せて悲しそうに顔をして、いきなり俺の体を抱き寄せた。抵抗する間もなかった。

「ああ、私のフェイオン。こんな勇者に囚われているなんて、できることなら解放してあげたいよ」

俺は疲れておざなりな返事を返しただけだったが、アーシユが黙っているわけがない。俺とサラスを強引に引きはがして俺を腕に抱き込み、殺気と怨念が凝縮された低音で言葉を放つ。

「オ・レ・の・フェイだ。誰がてめえになんか渡すかよ。てめえにフェイはもつたいたいすぎるっ」

サラスも極上の笑みを張り付けたまま、怖いぐらいの棒読みで反撃する。

「ふふふつ、その台詞、そっくりそのまま君に返すよ。フェイオンと君では釣り合わない」

二人は互いに睨み合いながら俺の腕を左右に引っ張り始めた。ああ、腕が痛い。

「なあ、貴様等いい加減にしろよ……」

怒る気力もない俺は、半ばうわ言のように呟いた。今日は色々ありすぎた。もう眠ってしまいたい。

二人を取り囲んで騒ぎ、陰悪な雰囲気煽りたてている盗賊達の声が。俺を闘争の中心から助け出そうと尽力してくれているパレットが。

ああ、全部遠くの出来事のようなのだ。

ふう、全くもってやたらと疲れるな……。

ヒシュタの街にやっと戻ってこれたのは、その日も夜になってからだった。

何だか今日のできごとが何日にも渡って続いていたように感じる。長い一日だった。

帰りがけに公衆浴場にてふらふらになりながら入浴し、前日に泊った宿屋で部屋をとつたら、なし崩し的にまたアーシュと同室になってしまった。どうしてもアーシュが俺から離れないのだ。言葉通り、ずっと俺の体の一部に触れている。おかげで俺の疲労は山を越えて、もう疲れているのかそうじゃないのか分からない。

体を引きずるようにして部屋に入った俺は、アーシュをやつとこさ押しのけてベッドに倒れ込んだ。ああ、幸せだ。俺はふかふかの安らかな感触に身を預け、これ以上ない幸福を味わった。

が、しかし何だろう。今日は厄日なのだろうか。

服を適当に脱ぎ散らかしてシャツと下着だけになった俺が布団に潜り込むと、同じく軽装になったアーシュがベッドに侵入してきた。

「……おい、何勝手に入ってきてるんだよ」

抗議を完全無視してごそごそと俺の体に腕を回したアーシュに、向かい合う形でぎゅうつと抱きしめられる。

「んー、いいじゃねえか一緒に寝るくらい。あー、やっぱりフェイは抱き心地がいいなあ」

アーシュは俺の髪を腕枕している方の手で梳き、もう一方で抱き

しめるだけ。どうやら本気で添い寝するだけらしい。俺はそれなら別に構わない、というか追い出すのすら面倒だから、アーシユの胸に顔を押し付けて目を閉じた。

「……ごめんな、フエイを守ってやれなくて」

心地よいアーシユの鼓動を聞いていると、暫くしてから静かな声がそう言った。囁きに近いその声音は、甘くて少しだけ悲しげだった。

俺は胸から顔を上げて、俯き加減のアーシユと視線を合わせた。また眉間に苦渋が刻まれている。小さく微笑むと、一段と腕に力が込められたのを感じた。ちょっと苦しいけど、これはくらい我慢する。

「アーシユは守ってくれただろ。助けにきてくれて嬉しかった」

俺がそう言くと、アーシユは「違う」と呟いて俺の髪に顔を埋めた。

「守れてなんかいいえよ。犯されかけてた。結局、一発も殴れなかったし」

そう言えば、アーシユはサラスに実害を与えていない。唯の一度も、かすり傷さえつけなかった。俺はアーシユが誰も殺さなかったことを喜んでいるのだが。

「いや、確かに危なかったけど、結果的にそんなに酷いことされたわけじゃ……」

「っ、フエイ、あいつに何された？」

あつ、余計なことを言ってしまった。

アーシユは上半身を起こして俺の肩を半ばベッドに押し付けるようにして、やや強い口調で言った。俺は自分で掘った墓穴に内心自己嫌悪に陥っていたが、いつまでもじっと目を見据えてくるアーシユが真剣過ぎて、少し泣きたくなった。

「大したことされてないって。微妙に脱がされかかったただけだし」

「本当か？ 他に、変なことされてないか？」

「ああ、別に何も」

口付けられたことは黙っていた。思い出すのも嫌なのに、言葉にするなどできるはずがない。それに、アーシュが動転してサラスを殺しに行きかねない。

俺はアーシュの両頬を掌で包み、安心させるように微笑んだ。

「大丈夫だつて、な？　俺はもう引きずらないし、お前もそうしろ」  
アーシュは不得心顔で俺の瞳を捉え、微かに首を横に振った。

「違っただろ、嘔吐くなよ。平気なら、どうしてオレが駆け付けた時に泣いてたんだよ。あんなに、沢山」

そう言つて、アーシュは体を低くして俺に口付けた。優しく快い感触と温度に、ふっと安心して体の力が抜ける。やっぱり、俺はアーシュじゃないとだめみたいだ。

やや長めの口付けの後、アーシュは二度三度、深く甘いそれを続けた。

「……本当に、俺、大丈夫だつて。信じろつて」

「信じてないなんて言つてねえだろ」

少しイラついたようにアーシュは語気を荒くした。どうしたんだろ。

「アーシュ、俺が何か気に障るようなこと言つたのか？　何を怒ってるんだ？」

心配になつて赤髪に触れると、アーシュはまたもどかしそうに首を横に振った。黄緑色の瞳が、蠟燭の橙色を反射して、潤んでいるように見える。

あ……。

俺はやっと一つ思い当つた。ゆっくりアーシュの顔を引き寄せて、自分から一度口付けをする。

「もしかして、不安なのか？　俺がお前を置いて行くかもしれないつて？」

アーシュは僅かに頷いて俺をまた腕の中に隠し込むように抱きしめた。まるで、何か得体の知れない敵から、俺を守るかのように。

「そうだったのか。ごめんな、すぐに気付かなくて。アーシュ、俺は何処にも行かないぞ。ずっと、お前の傍にいるからな」

アーシュの胸に顔を押し付けたまま、声が震えないように気を付けないが言葉紡いだ。

俺と同じ想いを、背負うには辛すぎる想いを、アーシュも抱いていたんだと分かって。いつものふざけた調子で今まで隠してきたんだって分かって。俺をすっぱり収めてしまえるくらい大きい体だけど、心にはそんな余裕がなかったって分かって。

俺はアーシュが堪らなく愛しくなった。

## 勇者の宝剣と、夜の打ち明け話（後書き）

何だか、場所が一向に進みませんが気にしないでください（；ーー）

今回も読んでくださりありがとうございます。楽しんでいただけたら幸いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1039m/>

---

俺の旦那は勇者様

2010年10月8日14時01分発行